
コンプレックス

月乃宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンプレックス

【Nコード】

N2203T

【作者名】

月乃宮

【あらすじ】

ながせ・かよ
永瀬佳代は標準体重 + 15kg の自他共に認めるぽっちゃりさん。そんな彼女の前に現れた雪村さんは、これまたよく食べるイケメンで……ほのぼの美味しい現代ストーリーです

(1)

ある会社の昼休みのこと。

数人の気の置けない同僚らと一緒に、社のビルの近くにある定食屋で昼食を取っていた。

私はとある小さなグラフィック会社で庶務を担当している。

なにぶん社員が少ないのと、それから社内の年齢層が若いことがあつて、部署の垣根もなく男女ともに仲良く和気あいあいとしている。

「そついえばあたし、今朝も雪村さんにならまれちゃった」

「雪村つて、あの最近入った？」

「ああ雪村つて、専務がどつかで引きぬいてきたつていう奴だろ？」

ここ一週間ばかり、制作部に入った新しい社員の話題がよく上る。彼の名前は雪村氷介さん。グラフィックの腕を買われて専務が口説いてきた、という優秀なデザイナーさんだ。

「やっぱ冷たいわよ、雪村さん」

「そうか？ 俺は別にそうは思わないけど。確かにちよつと飄々としてるとこあるけどさ、話す時は結構話すんだぜあいつ」

「うんうん、この間の男性社員オンリーの飲み会でも、好きな野球のチームについて聞いて聞いてもないのに熱心に話してたよな。あれ絶対酔ってたぜ」

「ちよつとちよーつと、聞き捨てならないわね？ 何その男子オン

リーの飲み会つて？ 寒すぎー！」

「そつよ、どうしてあたしらも呼ばないの？ ねえ、永瀬さん？」

いきなり話をふられ、私は一瞬目をぱちぱちとした。

その様子をみてた皆が「まーた、だ」って笑う。でも悪意のある笑いではない。むしろ親しみをこめて「しょうがないなあ」とも言われ、私は「いやあ、ぼーっとしてた」と苦笑してみせた。

「ナーセも今度一緒に飲みいこうよあ」

「私飲めないよ？ ひたすら食べるだけだし、夜食べるとますます太るから遠慮する」

「えー、そのぽちゃぽちゃしてんのがナーセらしいんじゃない」

「だよなー、なんていうか永瀬って今流行りの『太つてもカワイイ系』だよな」

私は皆の言葉に苦笑を洩らしてしまう。ちなみにナーセとは、私こと永瀬佳代ながせ・かよのニツクネームだ。

確かに私は標準体重をかるーくオーバーしてる……15キロほど。健康診断では間違いなく『肥満』判定だし、いくら血液検査もろもろで健康的な数値をはじめだしても「もう少し痩せてください」と言われるのである。

でも、私はそれほど危機感を感じていない。

例えば割と背が低いためか、多少（というか、だいぶか？）太ってたってちゃんと着れる服のサイズはあるし、昔からこのサイズのせいでいじめられたり、友達できなかつたり、といった経験がない。学生時代も社会人になっても良い人達に囲まれており、本当に私は恵まれていると思う。

そりゃ私も女の子だから、過去にはダイエットなるものを試みたことがあった。

結果だけ先言うつとすべて失敗に終わったけど……何より必ず周囲に言われるのが『痩せなくていい』と言われることだ。

理由をきくと、このぼてぼてした体型が私のキャラに合ってるんだって。

そんなわけで周囲の言葉に甘えつつ？24歳になる現在もこのぼちやばちやサイズをキープ。

今日もおいしくご飯とおやつをたっぷりいただいている。

「だから今度、男女合同で飲み会しよーよ」

「お、いいね」

「雪村くんはどうする？誘う？」

女の子ら三人は微妙な表情を浮かべたが、それでもどこかソワソワしていた。「やっぱり誘おう」って話になって、私は心の中でそっと笑った……愛想が無く、女子社員の間でもっばら不評な雪村さん。

だけど皆気になってしょうがないのだ……なんせ雪村さんは稀に見るイケメンだから。

だからこそ、ちょっとしたことでも皆の話題に上ってしまうのだ……良いか悪いかは別として。

私は個人的に見て、雪村さんは確かにフレンドリーとはいいがたいけど、極めてフツーのひとに見える。周りの女の子たちが意識し過ぎちゃって、普通に対応できないのが冷たくされる原因のひとつでもあるんじゃないかとすら思ってる。

昼休みが終わってデスクへ戻る途中、雪村さんに呼びとめられた。

「永瀬さん、これいる？」

「はい？」

ほいつと渡されたのは、スティックココア。

私は???とした顔で手の中のを眺めていると、雪村さんはさつさとモニターに向かいながら「俺それニガテだから飲んで」とぼそりと言われた。

「おおお、ありがとうございますっ！　うれしいです」

「大げさな……」

あきれたように横目でちらつと見上げてくる雪村さんは、相変わらず端正な顔に冷たい表情を浮かべていた。私は軽い足取りで自分のデスクへ戻ると、さつそくマイカップを手に給湯室へと向かった。

春なのに最近寒いから、あったかいココアがしみるように美味しい。
い。

私は太っているだけあって、甘い物という甘い物に目が無い。

「でもちよつと甘み薄いかなー」

最近の嗜好品って、健康志向のせいかな甘さ控えめってのが多い。給湯室の戸棚におかれたお客様用のシュガースティックを取ろうとして、はたつと手を止めた……いけないいけない、医者に少しは痩せろって言われてるんだった。ま、これでも十分美味しいからいいか。

デスクへ戻ると、隣の女の子が声をかけてきた。

「それ、雪村さんにもらったんでしょ」

「うん」

「めずらしいね、なんか」

「まあ、ニガテだから飲めないようなこと言ってたし。誰かにもらったんじゃない？」

私の言葉に、その子は「なるほどね」と納得した様子で再び仕事へと戻った。

こんなつまらないことが、これから色々始まるきっかけになると誰が思えただろう……？

(2)

「はい、コレ」

「……またですか」

それから毎日、雪村さんはちょっとした折に私に食べ物や渡すようになった。

それは小さなキャンディー一粒ってこともあれば、まだ未開封のクッキーひと箱ってこともしばしば。

こんなことが始まって三日経つ頃には、すでに私と雪村さんの不思議なやりとり？は社内中に知れ渡っていた。

今では雪村さんが「これうまいよ」と、若干笑みまで浮かべて私に話すようになっており、その変化については私もちよっぴり過敏になった。

それは決して『もしかして雪村さんって私のこと好き？』なんていう軽い明るいノリではない。そんな色めいた可能性など、私はマツタク期待していないのだ……この私のサイズで、唯一『不自由』と思えるのが恋愛である限り。

そう、友達はたくさんいる。

でも私には未だかつて、彼氏と呼べる人を持った経験が無い。

もちろん『女として』モテた記憶も皆無だ。

私が心配したのは、社内にひそむ？雪村ファンの女子社員に、変なやつかまれないかということだ。そりゃいくら恵まれた境遇で生きてきた私でも、心無いかげ口のひとつやふたつ言われたことが無いわけではない。「太ってるくせにナマイキ」なんてのはまだカワ

イイ方である。

また誰かにかげ口言われるかな、と思うと嫌な気分になった。もしかしたら今までの経験をくつがえす、ものすごいイジメに会う可能性も無くもない……陰険な嫌がらせとか、どっかの少女漫画かなんかにありがちなパターンを思い浮かべてしまった。

……しかし、意外にもそういうことがあまりなかった。

それというのも、ひとえに雪村さんの評判がすっかり女子の間でガタ落ちになっていたからである。

その上イケメンも、慣れてしまえばフツのひととなるようで……小さな会社なだけあって、雪村さんもなんだかんだとなじんでしまったようだ……ただし『風変わりな変人』という不名誉なレッテルを貼られて。

「永瀬さん、昼飯行かない？」

「いいですよ」

そんなやりとりを、周囲の社員はどこか平和なムードで傍観ぼっかんしている。

やれやれ、これであいつも一緒に昼メシ食う友達ができたか、って感じだった。

連れだって行く先は大抵ラーメンかカレー屋か、もしくは場末の定食屋。

まったく色気は無いに等しい。

「やっぱりニンニク入りはダメかなー……」

「雪村さん接客しないし、大丈夫でしょう」

「でもこの大盛りラーメン、生ニンニクかなり入ってるぜ？ デスクの隣近所に大迷惑になるだろうな」

スレンダーな体のくせして、やはり男の人だけあって雪村さんはよく食べる。

ラーメンが好きらしく、行けば必ず大盛りを注文する。

……で、私もつられて大盛りを注文する。

「永瀬さん、味噌バターか。そつちもつまそつだな」

「ひとくち、食べます？」

「うん」

そうして雪村さんの食べるとんこつラーメンと交換した。

こんな風に必ず人の食べてるものも食べたがるから、こんなことはもう慣れっこである。

「やべ、こつちもつまい」

「ですよね」

「次回こつちにしよう」と

「でも、とんこつも美味しいですよ」

「だよな」

そんな感じに、食べてる間中ずっと食べ物話題だ。会社のことはもちろん、友人関係も個人的な話題も一切なし。すがすがしいほどに食べ物オンリー。

こつちのつて、食べ友つていふのかも。

雪村さんと私の食べ友つぷりは、当然社内中が知るところとなっ

ていた。

「なんか雪村さんってホント、イメージ狂う」

「あの人についていけるのはナーセだけだよ。いつそのこと、付き合っちゃえば？」

「何言ってるの？」

私は内心どきまきしつつ、のん気を装って笑ってみせた。

会社帰りに友達の女子社員二人と連れだって、私は久々にちよつとばかりお洒落な洋風居酒屋なんぞにいた。

「結構お似合いだと思うよ」

「またまたー、あんなカツコイイ人は無理だつて」

「外見は、ね。でも中身があれじゃー……この間だつて、昼休み帰ってきたらすっごいニンニクの臭いさせてさあ、あれはありえない」

「ああ、あのラーメンね……私は止めたんだけどねえ」

私はクスクス笑いながら、箸でつまみあげた鳥の軟骨揚げをぽいっと口に入れた。

「最近ナーセがお昼一緒にきてくれないからさみしいけどさあ、私たちとしては雪村さんとうまくいってもらいたいわけよ」

「そうよ、ナーセもまんざらじゃなさそうだし。あとは雪村さんが奥手じゃなければ……」

「ちよ、ちよつと待ってよ。いったい何の話？」

目の前に座る二人の同僚は、急にニマニマといやらしー笑顔を浮かべた。

「だあって、雪村さん絶対ナーセに気があるよ」

「そうだよ、じゃなきゃあそこまでナーセに構ったりしないって」

「いやいやいや、私たちただの『食い友』なだけだしっ!？」

「でもちよっと変わっている雪村さんのことだし、女の子のタイプだって普通じゃないんだよ、きつと……」

と、そこでその子が口を閉ざした。

一瞬にして、その場の空気が凍りついた。

「……そーかもねえ、私みたいに色気ないけど健康そのもの、がちり安産体型！つてのが好みの男、結構いるかもよ」

一瞬の沈黙の後、私はそんなことを口にしていた。

「やだあ、ナーセつてば、安産体型だつて！」

「でも子宝に恵まれそう、なんてね」

その場がフワツとなごやかな雰囲気にも包まれる。

二人ともどこか罪悪感を残した、しかしほっとしたような表情を浮かべていた。

そう『普通は』私みたいな女はモテない。皆も私も分かっている。逆に私みたいな女が男、特に雪村さんみたいなイケメンに好かれたら周囲は黙っちゃいないだろう。

……だから私は学生時代、人生で一度だけかもしれない恋愛のチャンスを、自ら拒絶したのだ。

あれは私が高校三年の受験の年で、某大学の下見にきてた時のこと。

先に卒業した先輩とぼったり校内で出くわした。

ずっと、永瀬のこと気になっていたんだ。

下級生の面倒見がいいと評判だった先輩にそう言われ、私の心は跳ね上がった……この先輩のことはそういう意味で意識したことは

なかったけれど、この一言で一気にときめいてしまった。

しかし……次の瞬間、私は反射的に頭を下げていた。

先輩のためではなく、私自身の保身のためだった……私に彼氏なんてできたら、周囲の友達がなんというか。

今まで仲良くしてきた人達の心が、私は心のどこかで信じ切れなかった。

私が入並みに彼氏を作ってしまったら、周囲の友達は変わらず友達でいてくれるか自信なかった。

今ふり返ると、当時私は馬鹿馬鹿しいほどに大きなコンプレックスを抱えていたのだ。

そしてそれは今も……馬鹿馬鹿しいほど私の心に巣食っているのだ。

「あれっ、それ残すの?」

いつもの昼休み、すっかり恒例となった雪村さんとのランチの席で、炒飯を前に私は蓮華を置いた。

「うん、今日はなんかお腹いっぱいになっちゃって……」

「でも、まだ半分近くあるぜ?」

「そうだねー。もったいないけど……」

そう言いかけて雪村さんを見ると、その顔が一瞬嫌そうにゆがんだのが分かった。

私はなんとも気まずくなってしまう。

「……まさかと思うけど、ダイエットとか言うなよ？」

「え、あ、その」

「くっだらねえことで、食べ物粗末にするなよ」

そのキツイ一言に、私は身が縮こまる思いがした。

だって、こんな食べ方していたら、いつまで経っても私の体型はこのままだ。いつまで経っても、雪村さんの隣に並んではいけない気がする……コンプレックスを抱えたまま、この人の隣に並べない気がするのだ。

雪村さんはしばらくの間、自分が手にしてる蓮華をじいつと見下ろしてたかと思ったら、ふいにそれを私の炒飯の皿につっこんだ。

ふわり、と湯気が立つご飯を救いあげ、それを私に向かって突き出す。

「ほら、食べよ」

「……ええっ、私？」

「当たり前だろ、お前の炒飯なんだから。責任もってお前が食べ」

「や、でも……」

「一人で食べないなら、俺が食べさせてやろうかって言ってんだ。

ホラ、口開けてみる」

思わず口を開けてしまうと、思いのほかやさしい仕草で食べさせてくれた。

なんだか涙がにじみそうだ。

「はつきり言っておくけど、俺はあんたの食べっぷりに惚れてるんだからな」

「……！」

少し赤い顔をごまかすように、雪村さんは大げさに眉をしかめてみせる。

普段飄々としている雪村さんにしては珍しく表情豊かだ。

「俺きらいなんだよ、人とメシ食ってるのに全然食べない奴。『太っちゃうから』とか言っておくけどメシもろくに食わないくせに、どこそこのスイーツが好きだの言う女にもあきあきしてんだ」

「雪村さん……」

「それで俺がうまいラーメン屋へ連れていこうものなら居心地悪そうにするんだ。そういう場合後から決まってイメージ合わないだの、今度はカフェとかにしようだの、変に気取りたがるんだ。そんな面倒な女、こつちから願い下げだ」

「……それは、ひどいですね」

「だろ？ そう思うだろ？ だから、あんたにはそうなって欲しくないんだよ。せつかく理想の奴見つけたんだし……」

そこまで言って、雪村さんは言葉を切った。

そのまましばらく無言で向かい合っていた私たちは、やがて再び炒飯に挑み始める……もちろん私も一緒に。

「……やっぱ、ここの焼き豚うまいな」

「……ですよね」

そんないつもの会話をしつつ、私たちはお互い自分の皿を綺麗に

平らげたのだった。

（おわり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2203t/>

コンプレックス

2011年5月21日14時25分発行